

令和3年度群馬県地域おこし協力隊情報交換会 開催概要

1 日 時 令和3年6月23日(水) 13時30分～17時

2 場 所 群馬県庁28階 281-A・B会議室

3 出席者(計63名)

(1) 地域おこし協力隊員・隊員 OBOG (15市町村33名)

前橋市(2名)、桐生市(1名)、沼田市(1名)、渋川市(2名)、藤岡市(2名)、みどり市(6名)、南牧村(2名)、中之条町(1名)、長野原町(1名)、嬭恋村(3名)、高山村(2名)、東吾妻町(1名)、片品村(1名)、昭和村(2名)、みなかみ町(6名)

(2) 市町村職員(14市町村14名) ※各市町村1名

前橋市、桐生市、沼田市、渋川市、安中市、みどり市、南牧村、中之条町、嬭恋村、高山村、東吾妻町、片品村、みなかみ町、玉村町

(3) 県職員

行政県税事務所(9名) ※各行政県税事務所1名

前橋、渋川、高崎、藤岡、富岡、吾妻、利根沼田、太田、桐生
地域創生課(5名)

ぐんま暮らし・外国人活躍推進課(1名)

経営支援課(1名)

4 内 容

(1) 県(地域創生課、経営支援課)からの情報提供

(2) 県内隊員の活動紹介

・みどり市地域おこし協力隊 安西 未佳 隊員

・南牧村地域おこし協力隊 佐藤 祐太 隊員

(3) 講演

テーマ:「地域おこし協力隊が活かされる地域づくり」

講 師:ボノ株式会社 取締役 COO 谷津 孝啓 氏

(4) ワークショップ

テーマ:「地域資源を活用した新たな活動のストーリーを作ってみよう」

講 師:ボノ株式会社 取締役 COO 谷津 孝啓 氏

1 開会

2 挨拶（氏原課長）



本日は、お忙しいところ県内各地からたくさんの地域おこし協力隊員、隊員OB・OG、並びに市町村御担当者の皆様にお集まりいただき感謝申し上げます。

この情報交換会は、県内で活躍する地域おこし協力隊員の、情報共有の機会を設けるとともに、隊員同士の交流を図り、県内全域でのつながりを作ることを目的として開催している。県内では、4月1日現在、20市町村で108名の隊員が、農林業、観光振興、地域おこし支援、地域住民の生活支援といった、幅広い分野で活動し、これまでに任期を終了した隊員のうち、半数以上の方が引き続き群馬県内に定住している。

本日は、まず隊員、隊員OB・OGの皆様からの自己紹介、みどり市の安西隊員、南牧村の佐藤隊員の活動紹介、そして、ボノ株式会社 取締役COOの谷津 孝啓さんによる「地域おこし協力隊が活かされる地域づくり」というテーマでのご講演後、ワークショップを行う予定である。ぜひ、参加者の皆さま同士で意見を共有し、お互いを高め合うきっかけにしてほしい。

3 県からの情報提供（地域創生課 樋主事、経営支援課 戸部主任）



資料に基づき、地域創生課から県内の地域おこし協力隊の状況及び県の地域おこし協力隊に関する事業について、経営支援課から群馬県の創業支援事業について情報提供を行った。

4 自己紹介

地域おこし協力隊員・隊員 OBOG が自己紹介を行った。



5 隊員の活動紹介

(1) みどり市地域おこし協力隊 安西 未佳 隊員



私は香川県高松市出身で、この4月で着任3年目を迎えた。みどり市は現役隊員が現在11名で、観光、林業、木工、農業の4分野の隊員が活動中。私は、観光振興・情報発信の分野で活動している。

着任1年目からの活動を振り返ると、1年目は市内の既存のイベントやお祭りへの参加が中心。1年を通じて地域でどのようなイベントが開催されているかわかってきたところで、2年目は、自分で新規イベントや体験型プログラムの企画を進めたいと思っていた。しかし、新型コロナウイルスの影響で当初予定していた活動ができない状況になってしまった。

そんな状況での活動を紹介させていただく。私は着任当初から写真を撮影し SNS にアップしており、そこから形になるものを制作したいと思い、2種類のパンフレットを作成。ま

ず、みどり市東町の特産品の干し芋の制作工程をまとめた「あずまのかんそういも」と東町の小夜戸地区の小正月の伝統行事の様子をまとめた「小夜戸の小正月飾り」というパンフレットを作成した。パンフレットは、地域の魅力を発信する「地元自慢コレクション」に応募したところ、グランプリと部門の入賞をいただいた。賞をいただいたことはもちろん、地域の方々の反応が一番嬉しかった。SNSで行っていた発信は外向けであったため、パンフレットの作成を通じて地域の方との交流も深まり、年配の方は SNS をしていないので手に取れるパンフレットを作成したことで、とても楽しんでいただけるようになった。活動内容などの自分の情報発信をする良い機会となった。資料の QR コードから見れるのでご覧いただきたい。

次に、コロナ禍で取り組んだ活動について、昨年6月に写真展を開催した。きっかけは、毎年7月にわたらせ渓谷鉄道沢入駅で開催されるあじさい祭りが中止となり、代わりとなる企画としてあじさいの見頃に合わせてみどり市大間々で写真展を開催した。前年に撮りためた写真があったため、このような写真展を開催することができた。

12月には、みどり市産木材の端材や木の実などの自然素材を使ってクリスマスツリーやリースを作るワークショップを開催した。コロナの警戒度が上がり開催できない日程もあったが、満席となる日程もあり大変ご好評いただいた。

今年の春には、ひな人形展とそれに併せてみどり市地域おこし協力隊活動報告会を開催した。わたらせ渓谷鉄道花輪駅のふれあいセンターが、コロナ以前から十分に活用されていなかったため、その場所を利用して開催した。9日間の期間中、合計約600名が来場し、最後の土日は120名以上の来場があった。

続いて最新の活動内容として、みどり市地域おこし協力隊のポートフォリオとパンフレットを各隊員が自分を売り込みやすくするためのツールとして作成した。協力隊の概要から各隊員の活動内容・SNS を掲載し、協力隊とコンタクトを取りやすくすることを心がけた。

最後に、今後の予定として、コロナ禍で活動に制限がある中、今何ができるかということを考えながら取り組んで実際に活動してきた。それを今年だけのものにせず、定期的に行える取組にしていけたらと思っている。

(2) 南牧村地域おこし協力隊 佐藤 祐太 隊員



私は、大学生の時に南牧村に移住したが、なぜ縁もゆかりもない南牧村でやっていこうと思ったかという、妻と娘のためであった。「同級生が4人しかいない村に娘を居させたくない」という妻にも南牧村を楽しんでもらう村にするため、日々努力を続けている。

どうやったら仕事をしてお金を稼いで生活するかということを考え、現在、NPO 法人なんもく笑い塾・花農家・冬期の林業で生計を立てている。NPO 法人は「笑う村には福来たる」という理念のもと観光や教育等の活動を行い、花農家はヒペリカムとセダムを主軸として認定農家を目指しながらやっている。冬は花農家の収入がないため、今年3月に林業の(株)サンエイト企画をつくり働いている。特に農家については、お金にならない・忙しすぎるといったことが言われるが、自分はそう思っておらず、お金になるからこの仕事を選んで生活している。

自分の活動の中で、唯一守ってきたのが「NO」を言わないということ。他の協力隊から「何でこの仕事をやらされるのか」という悩みを聞くこともあるが、自分はお願ひされる仕事は全て引き受けていた。その結果、求められる仕事に目を向ければ「田舎に仕事がない」と言われることは嘘だと気づき、全てを「自分事」として活動することを実践している。人に言われたから乗り気じゃないという思いで活動すると、どうしても仕事は続かないし3年間という短い任期を無駄にすることになってしまう。与えられた仕事を自分事にして行っていくことは、その仕事の原動力にもなり自分の糧にもなる。仕事へのアンテナを高くして、常に「その仕事、自分がやります」と話すようにしていたら、次第に仕事の方から自分の所へ来るようになった。実際に、取材の仕事を引き受けた際、ガイドで来た方が南牧村地域おこし協力隊になってくれ、求められた仕事を自分事として発展させることの大切さを改めて感じた。

では、私の3つの仕事は何が求められていたのか。まずNPO 法人については、現在南牧村に観光の受け皿になるような組織はなく、役場の観光課しかない現状の中で、役場の範疇を超えることはできず、それ以上を求めてこられる業者などには応えられない状態であった。そこに活路があると考え、NPO を立ち上げた。花農家については、花卉生産組合の平均年齢が現在70歳を超えており、そこのおじいさんに「高齢者が多いため、若い世代の天下になるから今のうちにやっておけ」と説得され、また、新規就農補助金を利用すると定期的に補助金がもらえて家族を養うこともできるため、花農家を始めた。林業に関しては、南牧村の面積の8割にもなる手つかずの森林をどうにかしたいと思っているおじいさんを見て、やり手がないから自分たちでやるしかない。南牧村だけではなく、どの市町村も慢性的な担い手・後継者不足により、南牧村の場合無造作に伸び続ける茅や杉によって耕作放棄地がどんどん増えている。そのような状況を見て、やっぱり自分がやらなければならないんだと改めて思い、周りからも昔のきれいな段々畑だった頃を取り戻してほしいと言われ、おじいさんの持っている林業の素晴らしい技術を誰も引き継がれなかったらこの森はどうしたらいいんだろうと思い、NPO を立ち上げた。2年目でNPO を立ち上げたので協力隊の起業のための補助は使えなかったため、最初は自腹を切りながらやってきた。ようやく仕事をもらえる

ようになり、現在はやりくりをしながら色々なことをやっている。

しかし、NPO を立ち上げたのはいいものの、積み重なっていく仕事やその責任に戸惑い、自分で良いのかと思うときが今もあるが、家族を食べさせていくためと決めた以上、進めていくしかない思っでやっている。

1つ、気付いたことは、一人の力は微力だが無力ではないということ。自分が南牧村に来たときに言われたことが「住民の5%が変われば社会が変わる。自分の周りが変わればそれがどんどん派生して行って空気が変わってくるよ」と。真面目に一生懸命仕事をしていればいつかは人が付いてくるし、人が付いてくればお金も付いてくると思う。実際に、最近3年間で自分の周りで6人が移住をし、自分のしている仕事を手伝うと言ってくれている人もいたので、これから南牧村の移住者は増えていくだろう。

以上、これまでは自分が法人を設立しお金の受け皿を作り、さらに子どもを誕生させて人口を一人増やした。現在は法人で約12~13人を雇用し、来年は働きたい人を20人雇用することを目標としている。また、2025年には認定農家になりたいと考えている。そして、2027年、娘が小学校入学の時には同級生を4人から10人に増やしたいと思っている。

協力隊の3年間の任期はあっという間で、卒業後の進路というのは、仕事を自分事と考えて一生懸命進めていった先にあるものだと思う。

自分はこれからも南牧村にいるのでよろしくお願いします。

(3) 質疑応答 (2件)

【田村係長→佐藤隊員】

Q. 佐藤さんは「NO」と言わない、なんでも引き受けるということでやってこられたことが今の佐藤さんを形作っていると感じたが、今までの仕事の中で一番やりがいを感じたもの、あるいは「これは大変だった」というものがあれば教えてほしい。

A. 観光として南牧村の山に看板を設置するという仕事は、とてもやりがいを感じた。実施後も「ありがとう」と言われたが、自分は高所恐怖症で現地に行くまでが大変だったり、災害対応で役場職員として危険な場所に行かなければならないことはキツイ思う反面、自分事にすれば腹をくくっていけるので、キツイと思ったその先に達成感があったと思う。

【田村係長→安西隊員】

Q. 情報発信に取り組んでこられたということで、地域の魅力ある素材をどういう形で掘り起こしをされているのか、そのやり方を教えてほしい。

A. みどり市の観光ガイドに所属していて、ガイドの先輩方の直接のお話が一番勉強になるのでそこからです。

6 記念撮影



7 講演

○テーマ：「地域おこし協力隊が活かされる地域づくり」

○講師：ボノ株式会社

取締役 COO 谷津 孝啓 氏



まず、自己紹介としては、社団法人を昨年立ち上げたり、官民連携のアドバイスをしたりといったことをしている。「誰でも挑戦できる社会づくり」を人生のテーマに、色々なところで挑戦できる環境づくりを行っている。

今日のテーマは地域おこし協力隊が活かされる地域づくりということで、どんなことを期待されているのかを本日の参加者から指名するのでお聞きしたい。

【みどり市地域おこし協力隊 齋藤 真一さん】

今のところ自分自身の活動に不満がないので、皆さんの活動で困っていることや悩みを知りたい。

【高山村地域おこし協力隊 大澤 雅美さん】

現在高山村では OBOG が少ないため、隊員同士の交流ができることを期待している。

【片品村むらづくり観光課 戸丸 徳子さん】

協力隊が3年後どのように移住を考えているか知りたい。

【渋川市政策創造課 齋藤 大輔さん】

協力隊を受け入れる側の立場として、地域の課題とどのようにマッチングさせていくのか、協力隊の皆さんに3年間活動していただくのでどういった人材として輩出できるのか、無駄にさせたくないという思い。

ありがとうございました。協力隊の交流やどう定住してもらおうかといったことに関心があるようなので、普段地域に入り込んだり職員と連携したりといったこともしているため一般論より具体的なことを今日は話していきたい。

自己紹介をもう少し続けたい。アイスホッケーとハンドボールの二つの競技で同時に国体出場したので学生時代をスポーツで過ごしていた。先ほどの紹介のとおり、「我楽田工房」を東京都文京区につくり、コロナ前は全国の自治体の皆さんが移住のイベントをやっていた。このあたりは東京の下町で大学が多いエリアで製本と印刷が栄えているが、最近は少子化とデジタル化で斜陽になってしまっている。建物の1階部分が工場になっているが、空きが多く、放っておくとマンションになってしまう。こういった地域の資産を活かして、若者たちが挑戦できるような場を作っている。その他に、全国16の地域でエンジニア不足の解消に向けた取組やそれに向けたローカルDX協議会の立ち上げ、誰もが楽しんで地域の政策を作れるカードゲームなどでいくつかの地域と連携している。

では、メインの業務は何かというと、大企業の新規事業作成を行っている。実は、協力隊の皆さんは非常に可能性があると思っていて、今サステナビリティやSDGsやESGということをよく耳に思うと思うが、大企業は地域に入れず困っている現状がある。企業は地域に入ってくるとお金を取っていく立場だと勘違いされやすく、人を幸せにするまちづくりをしたい企業が多いのに結びつかない。そこで、地域と企業を結びつけてしっかりとして事業を作っていくことを主な業務として行っている。それに併せて、研修や政策策定支援等も行っている。

次に、なぜ地域おこし協力隊の募集・活動支援を行っているのか。地域おこし協力隊は社会課題を解決する上で最先端の活動ができるポジション。20世紀の経済と21世紀の経済では前提が大きく変わっていて、20世紀は経済が主体のポジションでここだけにコミットすれば良かった。その結果、地球環境が悪化してしまった。これをなんとかしなければという時代が21世紀。しかし、企業はそれまで地域に入ってこなかったため地域に入り込めない。そこに間違いなく地域おこし協力隊が入れるというのが自分の考えである。先進7カ国のGDP推移は1960年代が5.5%なのに対し現在は1.6%しか成長していない。どういうことかということ暮らしをより良くするため企業が頑張っても既に満足している人が多く、新しい購買活動が少なくなってきた。今までは、世の中・地域に課題がわかりやすい課題が多く「課題」にアプローチすれば良かったが、今は基本的に課題がないので「どの

ような課題を見つけるか」が重要となっている。なので、今後は「地域に住んでいる人たちが何に課題を感じていて、どんなことを望んでいるのか」を明確に言葉にしていけないとビジネスが成り立たない時代になっている。その一番近い場所で活動しているのが、地域おこし協力隊の皆さんである。一番身近になってこれからの高齢化と人口減少の課題をキャッチアップできるのは地域で活躍する地域おこし協力隊。そういう方とどのように連携していくかを企業は考えているものの連携しづらい現状に今ある。何が起きているのかをちゃんとキャッチアップしていけないといけなくなっている。それには、「観察」と「対話」が必要になってくる。その上で「データ化」する。これができるようにならないといけいない。

前画面のこれは脱炭素ロードマップ。皆さんが活動しているエリアでできることが非常に多い。例えば、農山村の再エネ、観光移住、交通、住宅など、ここに入っていく、つまり地域と連携していくには「地域の方たちと繋がっている人がどれだけいるか」ということが重要で、社会課題を解決していくための地域との繋がりが最初の導入部分になる。地方公共団体と地域おこし協力隊と企業が、地域住民と連携をとることで、地域課題に向けた企業連携が加速すると考え、それを今全国で実施している。原資は基本的に企業から出てくるし、企業と連携した社会課題の解決を地域おこし協力隊の皆さんと取り組んでいる。

地域おこし協力隊の可能性ということで、地域の課題や資源、市民生活や歴史や文化をきちんとキャッチアップしていくことは、地域おこし協力隊の経験がスキルになる。協力隊の方たちの中に、「自分の経験がスキルになる」ということをどのくらい言える方がいるのかという点に注意して先ほどまでの発表をお聞きしていた。地域で困っていることを活動している方は多いと思うが、自身が今まで身につけてきた経験やスキルをベースにした活動はできているか。そうじゃない方も結構いらっしやると思っている。実は、協力隊の大きな成功のポイントは、皆さんの経験やスキルが可視化され、ポートフォリオ化されて、地域資源と掛け算されているかどうか。これができている方は基本的にうまくいっている。一方で、ゼロから飛び込んで新たな活動されている方は初心者なのでうまくいくはずない。そういうことで、地域の課題や資源×協力隊の経験やスキル＝持続可能な地域の発展という式が成り立つと思っている。新卒で協力隊になった方や転職でなった方や事務職の方でも、地域の集会の議事録作成ができると重要なキーパーソンとして仕事を作るプロセスに至れる。

次に、協力隊の現状と課題についてお話する。協力隊に関わるステークホルダーは、行政職員、地域住民、それと重要だと考えるのが議員の方である。議会で「協力隊何やってんだ」というふうになると、担当課から「議会で追及されてしまうから」と言われてしまった協力隊の方もいるのではないか。地域おける協力隊の受け入れ体制が構築されていないがために、着任した隊員と地域でトラブルが起きやすいということは感じている。

任期終了後の協力隊は6割が同じ地域で定住しているが、途中で退任した協力隊を入れると、自分の実感値では定住率は3割満たないと思う。考えてみると7割の人が辞める企業は超ブラックで、協力隊の制度自体は素晴らしいが、移住して継続して住み続けることはディスプレイカッションしていく中で本当に大変だと感じる。そういった意味で、協力隊が受け入れ

られるためには、「この地域をどうしていくのか」という受け入れ体制を構築することが重要である。ここさえうまくいけば、協力隊を地域の人が守ってくれる状態になる。

ポイントは、地域の受け入れ体制構築で、目指すべき地域のビジョンを可視化すること。そのためのフレームというもの3つある。

①地域の過去のストーリーを把握する。各エリアで異なる産業や文化、人々の生活を把握することが非常に大切である。例えば、福島県浪江町では原発で入れなくなり昨年から10名協力隊を募集しようとしているが1年経っても集まらない状態であった。理由としては、沿岸部の浪江町は工業が盛んな地域で、近隣から多くが移住してきた方だった。移住者が多い地域はそうでない地域と比べて新しい考え方に前向きで、文化的な面にも現れる。そこで、浪江町も移住者に寛容な町で、「失敗に優しい町」というテーマで活動を開始したところ、それまで震災の影響で助けを求めるストーリーだったところを浪江町元来の産業や文化のストーリーの把握ができて移住者が入ってくるようになった。

②地域の現在の課題や可能性といった特徴を把握する。①は過去の話で、②は様々な社会情勢の中で「今はどうなのか」という「現在」が対象となる。成功したこともあれば失敗したことも多いと思うが、失敗事例もストーリーとして把握することが大切で、継続して地域に尽力してきた方々や、その方の話を聴いている現在のプレーヤーの方の共感を得ることができる。それを把握しないまま進めると、協力隊の本来の必要性をわからないまま、協力隊が活動することになり、協力隊が苦勞している地域でよくみられる状況になってしまう。

①と②を掛け合わせた挑戦のストーリーを作っていくことが、地域ビジョン可視化のためのフレームワークとなる。

この方法を各地域で話すと、②は把握されていて①がノーマークな場合が多いが、一番大切なことは①で、その地域に人が生活し続けている歴史があるのでそこに対し一番共感するのが地域住民。先ほどの佐藤隊員の活動報告では高齢者とのコミュニケーションは①が可視化されていることを感じた。

協力隊・職員の皆さんは自分が活動している地域の過去から現在までを知っているかどうか想像し、知らない方は〇〇市で検索してみしてほしい。これは、「ありたい姿」を見つけれなくて企業や個人が悩んでいる状態。実は、その地域の過去のストーリーを把握していくと、その地域が次に活動すべきことが見えてくる。例えば、栃木県真岡市。日本一のイチゴ生産地というのは知っていたが、深く調べると昭和30年代に当時の市長が当時日本一の工業団地を誘致しており、工業の町として日本一だった。そこで、日本一の挑戦ができる町という仮説が出てきた一方で、総合計画をみると町に残りたくないという高校生が3年間で劇的に増えていた、つまり地元高校生は自身の町で挑戦ができない町という認識であった。そこで、「日本一の挑戦ができる町 真岡」というストーリーをつくると、地域のキープレイヤーの方たちが過去のストーリーを知っていた方も知らなかった方も応援してくれるようになる。「未来」に何をするかというヒントが「過去」にある。

一方で、「自分はこれがやりたい」という主張のみだとストーリーがないから難しい活動

になるケースが多い。そこで地域のビジョンを可視化することを考えて、今日この話を聴いた方は地域の図書館等でやってみていただくとヒントが出てくる。

今日は、地域のビジョンの可視化に使えるツール「6つの資本」というフレームワークを紹介する。財務資本、製造資本、知的資本、人的資本、社会・関係資本、自然資本という6つの資本があるが、例えば過去に最高益を出した企業が数年後に台湾企業に買収されてしまった。つまり、お金以外の資本がどれだけあるかということが持続可能である条件ということが世界的に言われ始めている。自治体を例にとっても、役場に大金があっても人材がいなかったら面白い地域とは言えない。なので、皆さんが活動している地域ではどんな資本が強いのかを明確にしていくことが重要。例えば、自然を使いたい時は自然にアクセスできる地域の人の合意が必要、地域に素晴らしい資源があっても他の資源が揃わなければ活用できない状態になってしまう。そういう意味では、協力隊の皆さんはコーディネーターの役割も担っていて、地域にどんな資源があってもどの資源に対して誰がアクセスできるハブとなっていてその人たちがどうネットワークしているのか、ということが地域の人と繋がれる条件になっている。ご自身が人的資源となっているケースもあれば、協力隊と繋がっている人が資源となっているケースもある。このようなフレームワークがあるので詳細を知りたい方はご質問をいただければ。

もう1点、今すぐにできることで、「取材」がある。自分たちが協力隊のサポートをするとき、着任1年間は取材活動を絶対にやってもらっている。必ず月2〜3人、1〜1時間半程度、項目として、どんな活動をしているか、始めたきっかけ、一番大切にしていること、今後のビジョンについての4項目の話を聴いてもらっている。なぜかというと、この4項目に、過去、現在、未来が必ず入っている。

そこで皆さんが既に体感されていると思うが、地域の方にインタビューに行くと「まず君が何をやってきたか教えて」と言われ、自分の話をする場合も多いと思う。一方で、取材といって成果物になるものだときちんと話をしてくれる。3人×12ヶ月＝36人が可視化されると、協力隊に聴けば色々な人を知っているという地域の人を誰でも知っているという状態になる。人が可視化されると誰がどの情報を持っていてどんな資源を使えるかがわかる。もちろん自分の活動を磨き続けることもやっていく必要があるが、地域ビジョンの可視化ができているとうまくいっていると感じるケースが多い。

では、これまで構造的な話や考え方の話をしてきたので、協力隊の支援をしてきた事例を紹介できれば。まず一人目、前職は放送局のアナウンサーで地域の情報発信業務がミッション。情報発信業務は、本当に情報発信だけしていてもその地域で影響力のある人でなければリーチしなかったり、SNSでも広告費を出さなければなかなかリーチしなかったりする。どうやって情報発信するのかというのは難易度が高くて、だからやらないということではなく、自身の経験やスキルをどう掛け算するかということ。先ほどの事例の協力隊はラジオ番組が作れて、ラジオ局とネットワークがあるということを活かしていた。この地域は年間80万人の来客がある地域の祭りがあるが、子どもたちが地域のことを知らないまま高校

卒業後地元を離れてしまう現状があった。しかし、地域取材して回ると面白い活動をしている人が多くいることがわかり、子どもたちと地域の人を紹介するラジオ番組を制作していった。これはきちんと教育委員会と連携して、教育委員会から学校へ依頼し、学校の総合学習の時間で実施され、子どもからその親御さんも地域のキーパーソンを知る機会となった。この協力隊の方の「子どもジャーナリスト育成事業」という地域のキーパーソンを子どもたちが取材しラジオ番組を作り、ラジオのリスナーにもその情報を届けるという事業は、たまたまラジオ番組という媒体だが、この考え方は非常に参考になると思う。

もう一人の事例は、元中学教師で空手部の顧問だった方で、ミッションはスポーツツーリズム。この方は空手部の顧問だった経験から団体の合宿に目をつけ、さらにスポーツ施設の多さや色々な仕掛けをしているキーパーソン、野菜農家の多さを繋げて、必ず地元野菜が消費されるようなお弁当発注の仕組みを作った。1年目は空手部のみで延べ約400人だったのが、自分たちが関わって日本で唯一スポーツ合宿に特化している旅行会社と連携させて、延べ人数8000人×1万円＝8000万円を地域に落とすことに成功した。重要な点は、地域資源の可視化をしていき、協力隊が地域に受け入れられるためには協力隊個人の努力だけではなく、行政と連携して「なぜこの地域で新しい活動をする協力隊が必要なのか」を関係者が把握するということを追求するのが重要。

地域おこし協力隊が活かされる地域づくりとは、「地域の過去から現在までのストーリーが可視化されて、地域住民や行政が地域のなりたい姿を描くことができること」。これはすぐにできることではないので、地域資源の可視化ができていない地域はそれを深掘りしていただき、そうでない地域は過去から現在までのストーリーを職員や協力隊同士で対話をする時間を取ってもらうとよい。

8 ワークショップ

○テーマ：「地域資源を活用した新たな活動のストーリーを作ってみよう」

○講師：ボノ株式会社

取締役 COO 谷津 孝啓 氏



このワークシートを使ったフレームワークは、誰でも地域資源を活用したアイデアを作れるフレームで様々な場所で使われている。アイデアを出してと言われるとなかなか出ないが、アイデアは何かと何かの組み合わせで、自分が知っている情報をフレームに書き込んでいだけでアイデアにすることができる。

まず、活動地域と自分自身で思い浮かぶ名詞を挙げる。次に、皆さんが考える理想のまちで思い浮かぶこと（状態）を記入する。例としては、車を使わなくて良い、災害に強い等。最後にこの2つを掛け算してキーワードを作る。例：災害に強いこんにゃく。このキーワード＝アクションプランから、誰のためのプランか、どんないいことがあるのか、いつどこでどんなふうに行うのか、あなたは何をするのか、このプランの売りや必要なサポートはなにかを挙げていく。

～グループワーク～

このワークはトレーニングで鍛えることができる。理想のまちとはインプットであり、自分の知識の多さが重要である。「どんなまちになったらいいだろう」という妄想だけではなく、様々な地域づくり雑誌や他地域の事例や活動地域のキーワード、自分自身の特技などのキーワードをトレーニングすれば簡単に掛け合わせることができる。大切なのは、理想のまちの話ばかりするのではなく、そこに地域や自分のキーワードが掛け合わせられることによって、一気に実現可能性が出てくる。このフレームを使うことで、地域の方たちのやりたかったことの棚卸しができて誰でもアイデアが出せるようになり、それを実現するために協力隊が伴走支援をしていく。これも協力隊の役割だと思っている。こういったフレームを使って皆さんの地域をおこすきっかけとしてほしい。

9 閉会